

桜も咲き、サケの稚魚も川を下り大海を目指しているところです。大きくなってたくさん戻って来てほしいものです。水産研究本部が4月中旬～下旬に行った定期海洋観測の結果、オホーツク海海域では岸に沿って流れる宗谷暖流の勢力は例年に比べてやや弱め、沿岸部の水温も紋別沖以南では例年よりも最大で2℃程度低めとなっているようです。

▼網走水試のホームページに「マガレイの漁況予測」が掲載されています。道北日本海～オホーツク海に分布するマガレイは日本海で生まれ、多くは卵～仔魚期に海流によりオホーツク海へ輸送されます。その後、オホーツク海で未成魚期の2～3年間を過ごし、成熟の進行に伴い産卵のため日本海へ戻ります。このためオホーツク海では、漁獲の中心が2～3歳の未成魚、日本海では3歳以上の成魚となります。今年度のオホーツク海域における漁況は、5～8月の夏漁では漁獲の中心となる3、4歳魚の資源量が少なく前年度に比べ減少することが予測されています。また9～12月の秋漁では2、3歳魚となり新たに資源に加入してくる量や4、5歳魚の取り残し量が多くないことから、こちらでも減少が予測されています。当海域のマガレイ資源は平成27年度から連続して減少傾向が予測されており心配なところです。

▼先月下旬に行った「ケガニ漁場一斉調査」の結果、漁獲対象となる甲長8cm以上雄の100かご当たりの漁獲尾数は去年の1.3倍、過去(S61～H20)の平均値と比較すると7割程度でした。また、来年以降に漁獲対象となる甲長8cm未満雄の100かご当たりの漁獲尾数は去年の1.6倍でしたが、過去の平均値の3割程度であり、今後の資源状況が懸念されます。詳しくは網走水試のホームページを参照ください。

▼2年に1度発行されるFAOの「世界漁業・養殖業白書2016年」(日本語要約版)を見ました。序文の冒頭には漁業・養殖業は世界中の何億人もの人々の食品、栄養、収入と生計において引き続き重要な源となっているとあります。漁業による漁獲量は1996年以降、多く漁獲される魚種に変更はあるものの9,000万トン前後で高位安定しているようです。養殖の生産量はさらに増加していて漁業生産量を追い越す勢いです。漁業資源の状況では過度な漁獲を受けている資源の割合が2年前の29.6%から31.4%に増加しており、また漁獲の多くを占める魚種ではすでに十分な漁獲を受けており、漁獲量をさらに増やす余力はないとしています。今回の白書には10年後の2025年への動向予測も掲載されています。それによりますと漁業と養殖を合わせた総生産量は1.96億トンに達し17%の増加を見ていますが、これまでの10年間の成長率2.5%よりは減少(1.5%)するようです。増加の要因は主に養殖生産量の増加によるもので総生産量に占める養殖業の割合は現在の44%から2021年には漁業を上回り2025年には52%に達するとの予測です。消費や貿易量の増加も予測されており、先進国では現状維持か減少、途上国では増加となっており、両者のギャップが狭まると予測されています。(網走水試 上田)